フィリピン靴産業集積地における生産構造に関する研究

―企業間分業の成立条件とは何か―

平成 18 年度入学
派遣先国：フィリピン
福田　晋吾

キーワード：フィリピン、靴産業、生産構造、分業、産業集積

対象とする問題の概要

経済のグローバル化により、あらゆる製品やサービスが世界的な競争に晒されている。フィリピンの靴の国内市場においても、WTO の加盟を契機に海外から輸入品が大量に入ってきており、その数は年々増加の一途である。フィリピンの靴産業は 80 年代の経済自由化策以降、輸出がほとんどなくなり、国内市場に集中するという戦略を取ってきたが、もはやその主戦場である国内市場でさえ輸入品にシェアを奪われ、いまや存亡の危機に瀕している。

フィリピンの靴産業が経済自由化以前は輸出産業として栄えていたにもかかわらず、次第に競争優位性を失っていった理由として、しばしば生産コストが高いことが指摘されている。しかし一方では、フィリピンと賃金水準が同程度で、原材料も輸入に頼るタイやマレーシアの靴輸出額がフィリピンとは違い増加している事実がある。なぜフィリピンだけが急速に衰退しているのか。これが本研究の問題意識である。

研究目的

靴産業は一般に、自動車産業同様、部品を下請企業が製造し、それを元請企業が組み立てるという分業構造をなしている。例えば、日本では神戸市長田区が靴産業の町として有名であるが、同地では戦前には分業構造が確立されていた。しかしフィリピンでは現在に至るまで、各靴メーカーがそれぞれ一社内で垂直的に靴を生産し、ほとんど企業間の分業が見られない。

本研究では、前述の問題意識と、フィリピン靴産業の生産構造の特殊性に注目して、①企業間の分業の有無は生産性にどう関係するのか、②分業が成立するための制度的条件とは何か、という２つの問いを立ててみたい。これら２つの問いを検証することが本研究の目的である。

フィールドから得られた知見について

フィールドに出向く前に私が読んだいくつかの先行文献は、WTO の影響について、経済のグローバル化の文脈と関連させて論じている内容が多かった。事実フィリピン靴産業に関する統計を見ると WTO 発効を契機に業界が衰退していることが分かる。最大の集積地であるマリキナ市には、90 年代前半に約 3,000 社の靴メーカーがあったとされるが、今やその数は 10 分の 1 の 300 社を割っている状況である。そしてフィールドで実際に靴メーカーを回ったが、それを裏付けるように、廃業している工場が目立ち、経営者は厳しい現状を訴え、中には「フィリピンの靴産業は死んだ」とさえ言う者もいた。当然このようなあまりに急激な衰退は WTO の影響が大きいことは間違いない。

しかし、私はフィールドで靴メーカーをインタビューし、観察する中で、企業の規模の大小を問わず、外注を嫌い、多くの企業が自社で一から十まで靴作りのプロセスを行なっていることに気付いた(図１参照)。ある靴メーカー経営者はインタビューの中で、「他企業への外注は商品のクオリティに確証が持てず極めてリスキーである」と話し、また別の者は「外注に出すより自社でやったほうが安い」と語っている。もう一つ気付いた興味深い点は、マリキナ市では、業界や地域を横断する統一的な業者組合が存在せず、7 団体が乱立し、２つの大きな団体が対立していることである。このような同業者間の関係も、日本の産業慣習とは大きく異なっている点である。

上記の２点はいづれも、フィリピンの靴メーカー間の信頼関係が希薄であることが影響しているように感じている。つまり、分業と活発な業者団体の成立に、企業間の信頼関係が重要な役割を果たし、取引費用の削減に繋がっている可能性があるといえよう。このフィールドから得られた仮説を検証することが問いへの答えに繋がると考えている。

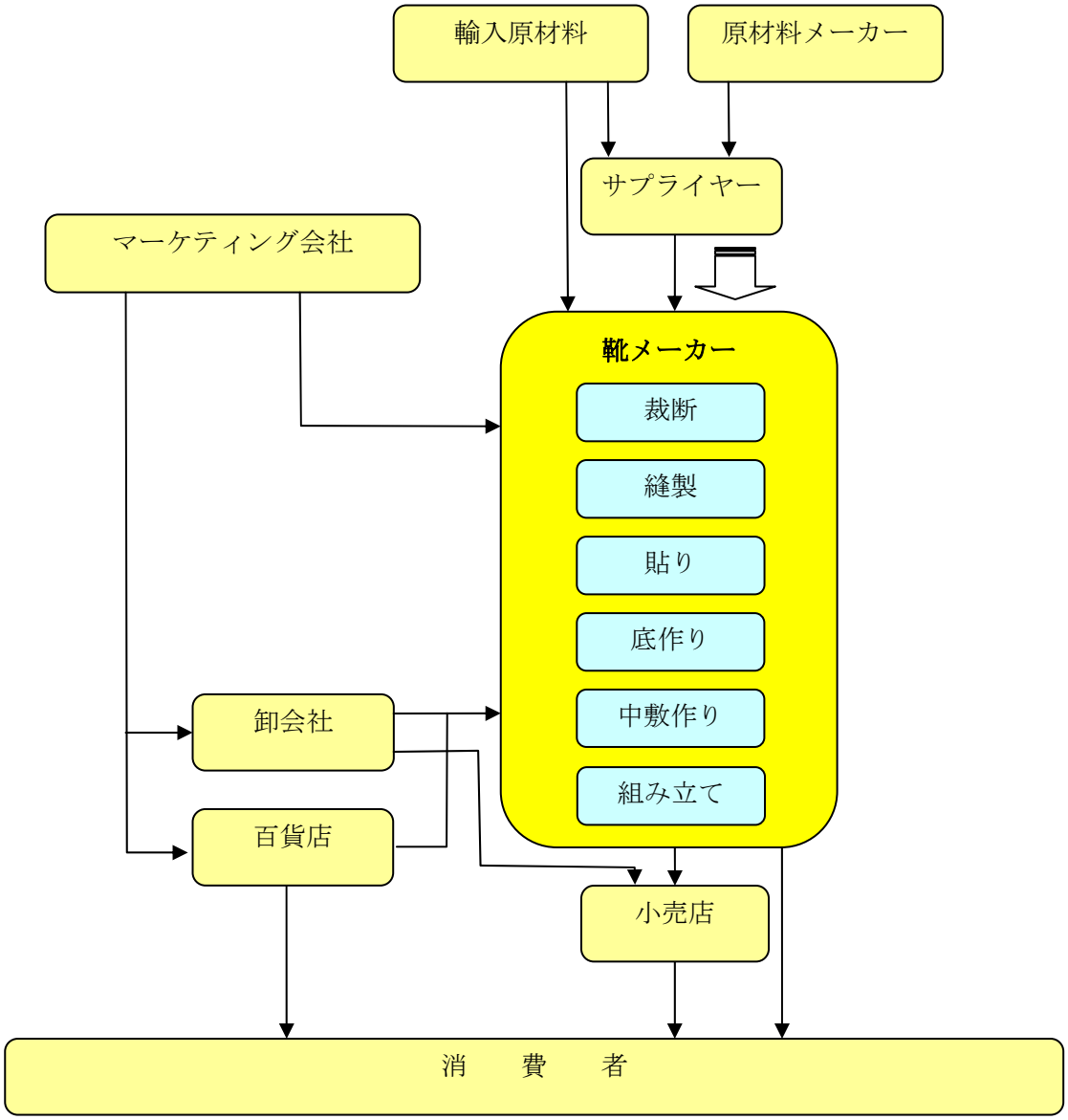

図１　フィリピンにおける靴生産のフロー

今後の展開・反省点

企業間の信頼関係を計量することは難しいが、取引費用という概念を用いてある程度可能になると考えている。分析に必要なデータを収集することが今後フィールドで必要な作業であろう。さらに長期的には、本研究はフィリピンの事例に留まらず、タイ、日本の神戸市長田区、生産数量で他国を圧倒する中国といった地域との比較を通して、より発展した議論に進むことを意図している。

今回の調査は自分自身初めてだったが、フィリピンのホスピタリティ溢れる国民性と英語の通用度の高さに助けられ、なんとか調査対象と接触しインタビューを行なうことができた。しかし、同時に反省点も多々あった。特に、出発前準備とスケジューリングである。質問票の項目をもっとしっかり考えるべきだったし、フィールドでは何かと時間がかかることがあり、アポイントに遅れることがよくあった。今回得られた知見と反省点をもとに、次回調査はより効率的で有意義なものにしたい。

写真 1　中小規模工場のアッパー製造部門

写真 2　仕上げ工の作業の様子

写真 3　ある靴工場にて(一番左が筆者)